

「地域を活かす情報」

Opinion

## グローバルな時代の 情報と市民



国際企業文化研究所所長  
大脇 準一郎

e-mail;junowaki@able.ocn.ne.jp

Cel:080-3350-0021

Line,カカオ・Skype: junowaki

Consultants Oct.2002, '02

No.217, JCCA

(社) 建設コンサルタンツ協会

### 1. 生きる力をつける教育

ある時、人生の師と仰ぐ方から伺ったこの言葉を今も鮮やかに思い起こす。「人の心を知・情・意と言うだろう。

“情”は心が青いと書くように、いつも瑞々しい新鮮な刺激を受けながら喜んで生きることが大切。だが、ただ喜んで生きているだけでは発展が無い。

“知”は、口に矢と書くように現地点から目標である的に向けてどのようにそこへ辿りつくか、論理的筋道をつけるのが知であるが、あれが良い、これが良いと考えているだけでもだめだ。

“意”と書くように思いを心に留め、目標に向かって決心して行くことだ。人生とは簡単だよ！要するに、喜びをもって(情)、いろいろ考えながら(知)理想を目指して、行く(意)ことだよ！」

景気が低迷を続ける中、最近、日本の経営能力の国際評価が、がた落ちし、話題となっている。この時期、経営面における日本の国際競争力を底上げすべく、今秋、立ち上げるナレッジMBA コースのプロジェクトに私も携わっているが、企画段階で最大の焦点となったのは、新しい知の概念確立であった。

日本の将来に本物の生きる力をつける教育が無いことを憂えた故草柳大蔵氏は、遺稿「教育論」で述懐している。

『これからは学歴なき学力、学習能力

が世間を渡っていく標準となる。学力とは自分の力、自分をどう創り、どう売り出して行くかであり、人にはそれを教えてくれる環境が必要である。

その第1番は家庭だが、日本にはそれがあるか？「いかなる国家も、善良なる家庭生活を有する間は崩壊せず」私はこの言葉が日本教育最高の、最後の選択になるような気がしてならない。』

これからの時代は、単なるデータや知識情報の詰め込みでなく、自由自在なる知の加工・創造能力の習得が大切である。そして知識を体系的に方向付ける知恵、インスピレーションが求められており、感力（情）や行力（意）というトータルな人間力が培われなければならないということである。

新しいナレッジ MBA コースは、学歴（形式）よりは、実力（内容）に重点を置き、日本を代表する実業界・学会の第一線の講師陣を網羅している。

（日経産業新聞 2002年5月2日）

## 2. 情報収集の基本

まず、どのように情報を得るかである。数千人規模の学術団体で事務局の責任を持っていた時、顧問の諸先生に会の方向づけについて、しばしばご意見を伺ったが、その折に学んだことである。それは「驚くほど正解な予測や創造的ビジョンは、95%以上新聞情報を毎日丹念に切り抜く作業から生れる」ということである。

このことは70年代、日本の国家目標についての研究プロジェクトの一環で、世界の数多くのシンクタンクを訪問しても、同じ結論であった。ただ、最後の決定には、世界に張り巡らされた人脈諜報で検証している。そのもの凄さを英国の国際平和戦略研究所、イスラエルの情報機関で痛感したことを、付言しておく。

ITが普及しつつある今日、印刷活字と人の心にある生きた情報との距離が縮みつつある。1996年、私はカリブ地域のNGO活動に携わり、拠点のパハマから米国・日本各地、さらに世界のNGOとの連絡上、どうしてもITと対峙せざるを得なかった。著名な先生方でもIT嫌いの先生を時折見かけるが、使ってみるとこれほど便利で有用なものはあるまい。車の運転を習うより易しく、命の危険も無い。今では全国各地に散在するNGOメンバー、世界各国のNGOとの常時連絡にはITを使い、電話や会議で補っている。いくつかのネットに参加し、自らも3つネットを管理している。

情報の共有・保存・検索・コミュニケーション・双方向どれを取って見ても、正に革命的变化をもたらす、時空の制約を超えるこの情報革命は、まさに社会を変える根本的力であると思う。

## 3. 人類が有機的に繋がる

“死の谷から骨が立ち上がって生きた

ものとなった”とのエゼキエルの幻にあるように、今や、ばらばらであった人類が、ITを核とする情報通信手段の発達のおかげで、有機的な繋がりを取り戻し、生き物となろうとしている。

ITの特性を考えてみよう。

第1の特性は顧客オリエンテッドである。今、顧客のニーズに答えるための競争が熾烈に行われている。官僚組織、巨大企業の弊害が次々に露呈されている昨今、最後の勝ち組はより効率的に民（地球市民）のニーズに答えるシステムを確立した者達である。

第2の特性は公明性である。大衆が直接、生の情報に接する機会が増えた結果、秘密にすることが極めて難しくなっている。今日まで罪悪・汚辱が歴史の暗闇の中に隠されてきたが、今や白日のもとに曝されるようになって来た。人々の良心、美的意識はこれらの汚物を一掃し、社会浄化を推進するだろう。最大ともいえる第3の特性は、時空を超えた同時性、常時接続性である。かつて知識は、一部のエリートの独占物で、その独占的知識の所有により、富裕層・特権階級を形成してきたが、ITの発達で知識情報の平準化を広域に志向するので、マルクスも出来なかった富の平等化をもたらす起爆材となりつつある。

江戸時代に為政者が「知らしむべからず、寄らしむべし」と言ったように、カリブや南米、発展途上国の最大の間

題点は、かつて植民地時代の宗主国が、奴隷として黒人をアフリカから連れて来たり、原住民に教育の機会を与えてこなかったことである。途上国では今日も幼い子供たちが教育の機会を奪われ、また多くの若者が働く機会も見出せないまま青春を浪費している。その姿を見るにつけ、胸が痛むのは私だけではあるまい。

政情不安で貨幣価値の変動の激しい発展途上国に、資本主義社会の論理を適応するのは、困難を極めている。このような世界の閉塞状況を打ち破る道具として、ITは、期待できるのである。

未来予測で著名な糸川英夫先生は生前、「日本人、5千万人、民族大移動論」（1982年）を唱えておられた。地球的規模から言えば、世界は一部のエリート層と大半の無知なる大衆に分かれているが、これを繋ぐ中間層、ミドルマネージメントをする人が5千万人位足りない。人類社会のマネージメントのために、日本人は幼年から海外組と国内組に分けて教育し、2人に1人は海外へ出かけるべきとの提案である。

われわれの既成概念の殻を打ち破る、まったく別次元からの数々の発想は、“逆転の発想”として、今も根強いファンを持っている。糸川先生から学ぶものは、いろいろな外枠や障壁もあるが、まずわれわれの心の中にある障壁、枠を取り払い、自らの心の自由を得ることの大切さであろう。

#### 4. 地域活性化の3要素

1990年代初期、市町村役場の若者、県・市議員、大学教授等と“鳥取自由自在の会”を創設し、地域活性化のアイデアを練った。当時、地元活性化の為に大学誘致の話があり、私も“国際職業訓練学院構想”を提案した（1994年4月22日、日本海新聞『潮流』）。昨年、鳥取環境大学としてスタートしたが、地域のニーズに答えるだけでなく、今、国家が必要としている“国際社会に貢献できる人材”、世界に出かけてODAを使いこなせる人材を輩出して欲しいと願っている。

鳥取大学の中山間地活性化プロジェクトで、奥山教授のアドバイスの下、自治省、全国ふるさと推進協議会を通じて各地を訪問し、調査研究する機会があった。そこでわかったことは地域活性化には、3つの共通の要素があることである。

第1は、アイデンティティ（価値観）の確立である。過疎化し、元気のない地域は、皆、「どうせだめだ」とマイナス志向をしている。この概念を如何に打ち破り“逆転の発想”をするかで、JRも廃線となった熊本県小国町は、木を新しい角度から見直すことにより、地域の誇りを取り戻した。

第2の要素は、新しい価値観をどのように普及していくか、コミュニケーションの問題である。

交流するには何らの場や機会が必要で、交流の場としての箱物の建造物もさることながら、感銘深かったのは小国町の宮崎町長が、町にUターンしてキノコ作りをしていた江藤青年を木魂館の館長に抜擢したことである。昼夜、公私を問わず、気軽に話し合える雰囲気江藤青年は作り出し、木魂館は街づくりの最大の情報発信基地となっている。町外から訪れた人々にも違和感を覚えさせない人柄は、全国にも人的ネットワークが自然と広がっている。

地方自治体の長が4～5期も勤めるのが普通で、停滞感が蔓延している地方が多い中、ITを武器に新しい改革の波動を起こしている地域がある。

鳥取のZIT（じげネット）称する地域振興を目的としたメーリングリストには、大学学長、銀行会長、県の幹部も肩書きを外した気さくなおしゃべりをしている。そんな自由な雰囲気の中から新しいジゲ（地下）興しのアイデアが生れている。自由自在の会も1994年頃の鳥取を変える力にはならなかったが、一貫して地域の活性化に挑戦して来た小谷寛氏のZITが鳥取に新しい息吹を吹き込んでいるのを見るにつけ、社会変革の武器として登場した“ITの威力”を痛感する。

地域活性化の第3の要素は行政主導から行政参加型の政治手法である。

小国町で、婦人チームは料理の腕を磨き評価される場が提供され、別のチ

ームは町の土地利用計画の夢を練っている。林業を育種から生産加工、建築まで一体と捉え、青年に面白みを与える起業の試みもある。「第3セクターは補助事業の適用にならない」という国の方針を変更させて、軌道に乗せているのだ。

平松知事はかつて通産官僚だけあり、中央官庁の縦割り行政を横につないで、地域活性化の基盤作りに生かしている。これは出雲の岩国市長が見せてくれた21世紀型政治手法である。行政主導（啓蒙開発後進国型、上意下達）から行政参加型（民主的先進国型、下意上達）に切り代わることによって、女性と若者が見違えるように輝き出すことは間違いない。

## 5. 情報源と報道

地域活性化の情報源の第1はやはり、主体である人である。地域へのこだわりを持って磁石のように人々を糾合でき、地域の誇りとなる価値観を創造できる中心人物がいるかどうかである。

地域活性化の第2の情報源は、新聞、テレビ・ラジオ等のメディアである。ITの普及にともない、今やインターネット情報が主力を占めつつあるが、90年代初期は、衛星通信による農林水産省のグリーンチャンネルや（財）地域活性化センターのビデオ情報も大いに参考になった。第3の情報源は、大学・シンクタンク・図書館である。地域活

性の志さえあれば、これらの情報源を駆使して大概のことは出来る。

鳥取で思い出すのは、エアコンが効いた農協事務所で背広やワンピース姿で出勤することを好む同世代の青年を尻目に、嬉々として農作に励む田中青年のことである。彼は農協の手を借りず、耕作する主人の居なくなった休耕地を片っ端から借り受け、今では町内の半分以上の耕地を借り受け、有機米を栽培し、その米は宣伝しなくても口コミで全国から注文が来ている。

みかん作りの高知の青年、ザボン作りの長崎の青年、りんご作りの秋田の青年、ジャガイモ栽培の北海道の青年、各地から自分の自慢の産物が届けられる。みかんやジャガイモがこんなにも美味しい物かと本当に驚いた。彼の熱意に誘われて現地にまで伴に車で訪れた県もある。農業が楽しくてたまらない田中青年の息子さんも、自ら志願して農業高校に通い、お父さんの跡を継ぐことに張りを持って手伝っていた。

田畑で働くのは、80、90歳の老人ばかり、農業の行く末を心配した農林水産省は10兆円もの巨額を農業後継者問題に当てているが、問題は金でなく、農の志ではなかろうか？組合を次々に統合し、銀行まがいの資金の利ざやで生き延びようとする、“土をわすれた農協”に将来はあるのであろうか？

農協から独立した畜産組合を創設し

た中村組合長は、戦地から引き上げた当初、賀川豊彦の立体農業の講話にインスピレーションを受け、米余りの時勢に鑑み、一大決心をして畜産の道を拓いた。内モンゴルの多くの青年達を鳥取大へ留学させ、わが児のようにお世話された。

大阪や京都の生協と直接の販売ルートを開拓した大山乳業が、明治牛乳から告訴された。大企業を相手にどうなることかと心配だったが、明治牛乳が牛乳に椰子油を混ぜて薄めていた事実が暴露され、返って、販売拠点は関西一円に拡大した。当時の事情を語る中村組合長の生き生きとした話し振りが忘れられない。

教育学的視点から 80 年の生涯を理想的農村建設の夢に掛けてこられた草刈先生を通して、私は有機農業の全国ネットワークの人々、イスラエルのキブツ、西安市にも何度か出かけた。

また、94 歳にして、なおも元気に月の半分は内モンゴルへ植林に出かけ、残る半分は全国を講演で東奔西走されている遠山先生のお手伝いもした。

私を知る限りにおいてもこのように、聞けば感動し、「皆が元気になる情報がいくらでもある」にも関わらず、今日本はどのようにして元気が無いのか？毎日暗いニュースを過剰に流すマスコミの報道責任を問いたい。

竹村健一氏がニュースを報じる人間の 3 段階説を披露したことがある。ま

ずニュースを報じるだけ、次にニュースを解説する人、第 3 にそれではどうすべきか、オピニオンを言える預言者的役割、竹村氏は第 3 の役割に心がけて来たという。

1 つの情報によって人は、病気になったり、ひどくは自殺にまで追い込まれる。逆に、一言の言葉によって、勇気を得て、どうしようもない逆境を克服した例は、さらに多い。同様に、この社会を元気にするのも沈滞させるのも、情報である。社会的公器としてのマスコミの社会的責任は重い。

## 6. われわれ日本の課題

近年、日本は日本衰亡論が話題となってきた。その根本原因は国政レベルでも地域と同じで、日本人が世界に胸を張って誇りうる、歴史的伝統に根ざしたアイデンティティ・価値観が無いことである。

今、われわれが自ら問わなければならない第 1 の課題は、「エコノミック・アニマルで良いのか？」「国の誇り、社会の正義は、お金で済ませられるのか？」「日本外交を外務省のみに任せておけるのか？」という国家理念につながる問題である。

昨年南米 NGO 活動から帰国して、本年、有志と日本の未来構想作りに取り組んでいる。そこで考え議論していることは、われわれの価値観は未来へ向けて創造して行くものであり、それは、

文明史において日本文明がいかなる役割を果たすのか、世界的視野の中から見出すべきものかということである。日本人が誇りうる価値観は、単なる過去の復古や現実の平行移動、西欧の物まねではないはずである。

そして第2の課題は、人間交流の基盤である家庭が崩壊・矮小化しつつある今日、いかに活気ある人間交流を再建できるかである。第3の課題は、教育・行政・国際協力の場合でも推進されつつある民間の活力を導入することだが、まだまだ時間がかかるようだ。

## 7. グローカルな世界をひらく

地域の目標・国家の目標・世界人類のグローバルゴールも、所詮、われわれに最も身近な「価値観の確立・その普及・行政参加型手法」この3つの展開の延長でしかない。

人間が何らかの価値観を持って、環境と交わって出来たものが文化であるとすれば、環境条件やその共同体の価値観の差異によって国民性や文化の違いが現れる。たとえば韓国文化は、内的幸福（平安・アイデンティティー）型、日本は親密（人の和）型、米国は達成（科学・技術）型で、それは長所であるが、裏返せば短所でもある。

民族を超えた喜びある交流を重ねて平和な世界を求めるのならば、人間性の実現を目指して「お互いを尊敬し学びあう、謙虚な比較文化論的視座」を

持つことがその世界を開く第一の鍵になろう。

地球環境を守るために、水や資源をリサイクルしたり、日々の生活を変える意識が高まってきて、身近な人々と共同した住み良い地域づくりが途についている。その地域を足場に、ITを活用して世界の人々と交流する“グローバル”な時代の到来である。

情報は“情を知らせる、情に報いる”と書くように、最も新しい生きた情報は、人の心の中にある。その意味では結局、人が問題であり、質の高いヒューマン・ネットワークを創れる人が変革のキーパソンとなると言えよう。

そのような時代の潮流に棹さすナビゲーターとして、改めてメディアの役割の重要性を強調したい。（了）